一二〇代 仁孝 二四七七—二五〇六

家齊（二四四七七）

二四六九	同	文化六	津軽兩氏に蝦夷地を分掌せしむ 間宮林蔵黒龍江地方を探檢し歸る
二四七〇	同	七	英船常陸に來る○竹内式部上田秋成(年七八)各歿す
二四七一	同	八	露艦蝦夷に來る我戍兵艦長ゴロウインを捕ふ○朝鮮聘禮を對馬に受く ○文身を禁ず○村田春海歿す(年六六)
二四七二	同	九	露艦高田屋嘉兵衛を送還す我亦ゴロウインを放つ○蒲生君平(年四六)尾藤二州(年六九)各歿す
二四七三	同	一〇	露艦高田屋嘉兵衛を捕ふ
二四七四	同	一一	北地戍兵を撤す○伊能忠敬沿海實測圖成る
二四七六	同	一三	賴春水(年七一)山東京傳(年五六)各歿す○英船琉球に來り互市を請ふ
二四七七	同	一四	仁孝天皇受禪○杉田玄白(年八五)古賀精里(年六八)各歿す○英船浦賀に來る○高田屋嘉兵衛歿す(年五九)

家齊（二四七八—二四九七）

二四七八	文政元	一八一八	司馬江漢歿す(年七二) 高橋作左衛門滿洲文字の書を譯して幕府に上る
二四八〇	同	三	森狙仙(年七五)塙保己一(年七七)歿す○松前奉行を廢し其管地を松前氏に付す○南部津輕兵の北戍を撤す○伊能忠敬歿(年七三)(或は文化十五年七二)
二四八一	同	四	式亭三馬歿す(年四三)○上杉鷹山卒す(年七二)○英船浦賀に來る
二四八二	同	五	太田南畝(年七五)菅茶山(年八〇)各歿す○獨人シーボルト長崎に來る
二四八三	同	六	英船常陸に來り尋で寶島を侵す○清水濱臣歿す(年四九)
二四八四	同	七	外國船打拂令を發す○歌川豐國(年五七)太田錦城(年六一)各歿す
二四八五	同	八	將軍太政大臣に任ず○大槻玄澤歿す(年七二)伊藤圭介始めて物理學を唱ふ
二四八七	同	一〇	酒井抱一(年六八)本居春庭(年六六)各歿す
二四八八	同	一一	高橋作左衛門近藤重藏(年五九)各歿す○松平定信卒す(年七二)
二四八九	同	一二	大阪川口を浚し天保山を築く○十返舍一九歿す(年五七)
二四九一	天保	二	水戸齊昭諸臣に海防を講ぜしむ○賴山陽歿す(年五二)
二四九二	同	三	青地林宗(年五九)卷菱湖(年六七)本居大平(年七八)各歿す
二四九三	同	四	水野忠邦老中となる
二四九四	同	五	官製人參の賣買を許す
二四九六	同	七	大鹽平八郎亂を大阪に起す尋で自刃す○家齊職を家慶に讓る○堀田正篤西丸老中となる
二四九七	同	八	無益の翫物に費金するを禁ず(天保改革の始)○水戸齊昭封事を上る○鳥井耀藏に豆相等沿海巡視を命ず
二四九八	同	九	

家慶（二四九七—二五〇六）

二四九九	同	一〇	渡邊華山高野長英罪せらる○宇田川榕庵化學を首唱す
二五〇〇	同	一一	市中賣藥看板の蘭字を禁ず
二五〇一	同	一二	家齊薨ず(年六九)○堀田正篤老中となる○政治革新を令す○高島秋帆に西洋兵式を講ぜしむ○渡邊華山自刃す(年四九)○谷文晁歿す(年七七)
二五〇二	同	一三	外國船打拂令を緩む○海防を嚴にす○下田奉行を復す
二五〇三	同	一四	香川景樹(年七六)青山延于(年六〇)平田篤胤(年六八)各歿○水野忠邦老中免
二五〇四	弘化元		蘭使歐洲形勢を告ぐ○學問所を學習院と勅命○伴信友歿(年七四)
二五〇五	同	二	浦賀新砲臺築造○杉田玄卿歿す(年六〇)
二五〇六	同	三	孝明天皇踐祚○佛船琉球に來り米船浦賀に來り各交易を求む皆許さず ○海防嚴飾の勅諭幕府に下る幕府外國の事を上奏す

家慶（二五〇七—二五一三）

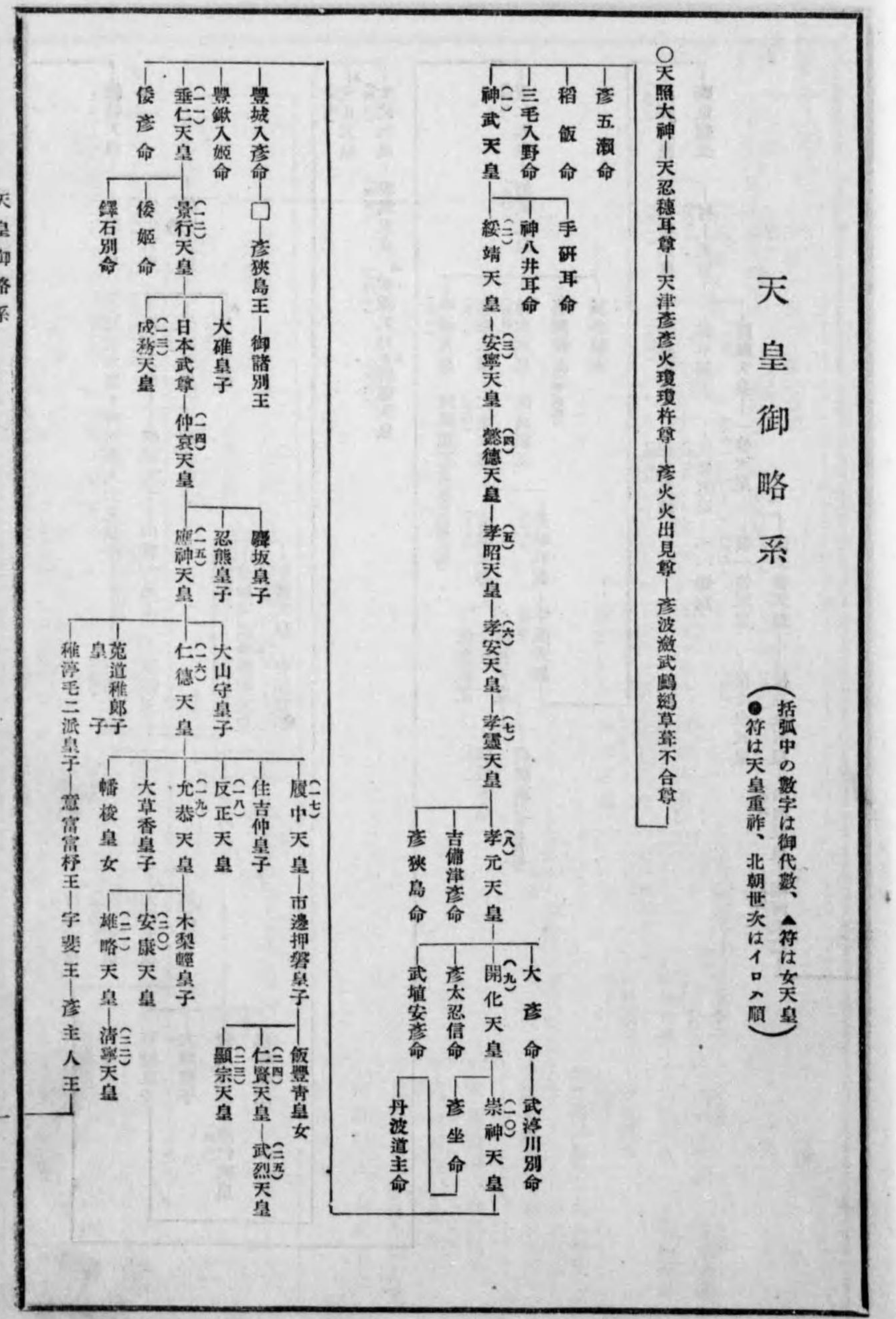
二五〇七	弘化四		蘭人再外交に付忠告す○水戸慶喜一橋家をつぐ
二五〇八	嘉永元		米船蝦夷に漂着す○瀧澤馬琴歿す(年八二)○藤井三郎英學を村上英俊佛學を首唱す○佐久間象山洋式野戰砲を造る
二五〇九	同	二	老中三奉行等に海防の議を上らしむ○英米船頻に來る○蘭人始めて牛痘を傳ふ
二五一〇	同	三	佐藤信淵歿す(年八二)○蘭人また忠告す○高野長英自殺す(年四七)○海防嚴飾の勅諭幕府に下る
二五一二	同	五	朝鮮來聘を延期す終に來らず
二五一三	同	六	米使ペルリ浦賀渡來○外國來航を上奏す○米國の書を諸侯に示し意見を徵す○露使プーチャン渡來○將軍家慶薨ず(年六一)○大船製造解禁
二五一四	安政元		米使再浦賀に至る和親條約締結す尋で英露兩國と締結す○吉田松陰佐久間象山捕へらる○日章旗を日本國惣船印と定む
二五一五	同	二	講武所を設く○蝦夷地を幕府直轄地とす○江川英龍(年五五)藤田東湖(年五〇)各歿す○蘭と和親條約を結ぶ
二五一六	同	三	蕃書取調所建設○米國總領事ハルリス來る○山崎美成(年六二)二宮尊德(年七〇)足代弘訓(年七三)各歿す
二五一七	同	四	軍艦教授所を設く○阿部正弘卒す○ハルリス將軍に謁す○米國との通商條約を議定す○幕府外國應援の情を奏上す
二五一八	同	五	老中堀田正睦上京して條約の勅許を奏請す許されず○井伊直弼大老となる○米國との條約に調印す○家茂を將軍の繼嗣に定む○水戸齊昭等罪せらる○露蘭英との條約を各締結す○將軍家定薨ず(年三五)○佛との條約を結ぶ○安政の獄を起す

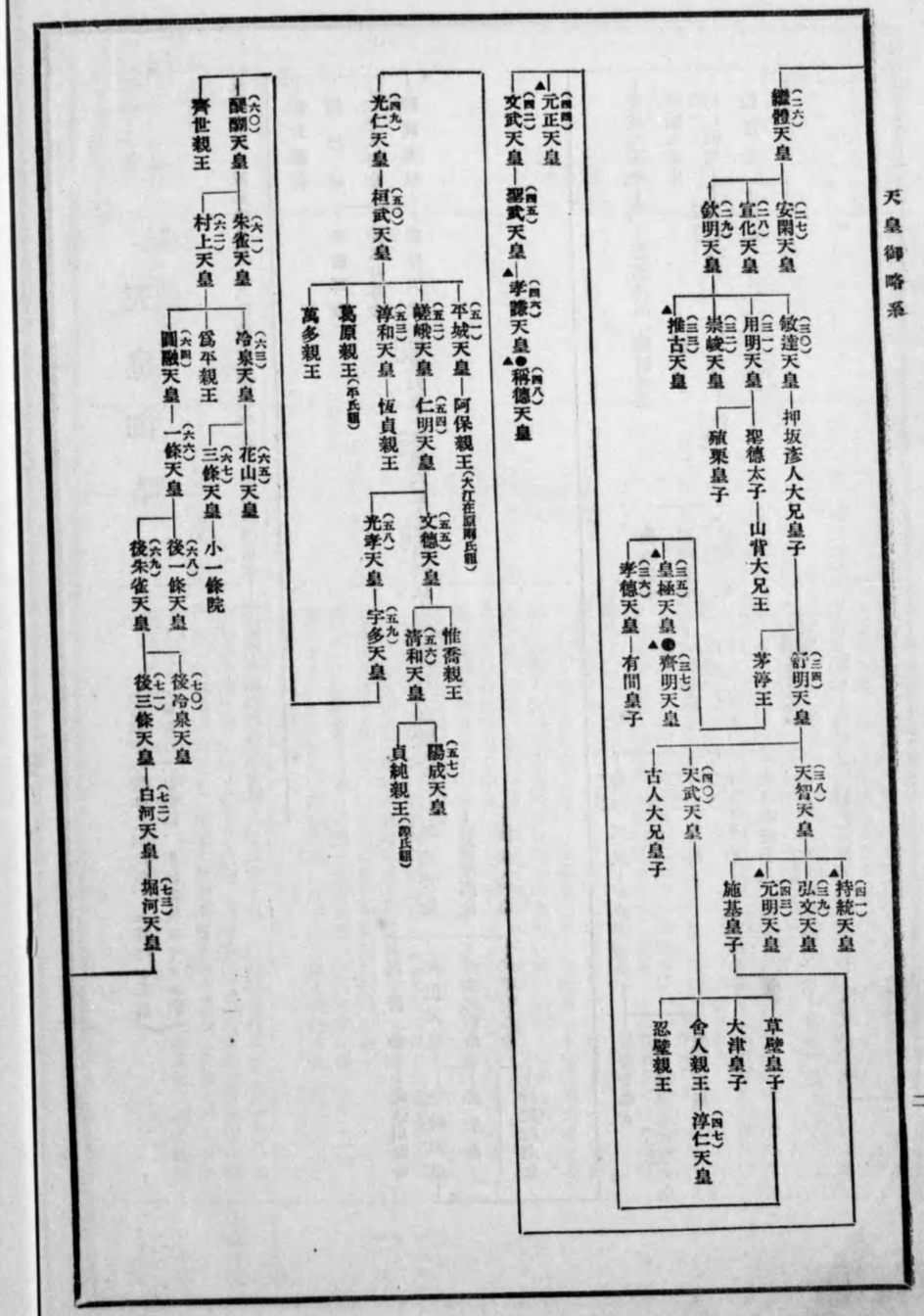
一二一代 孝明 二五〇六—二五二六

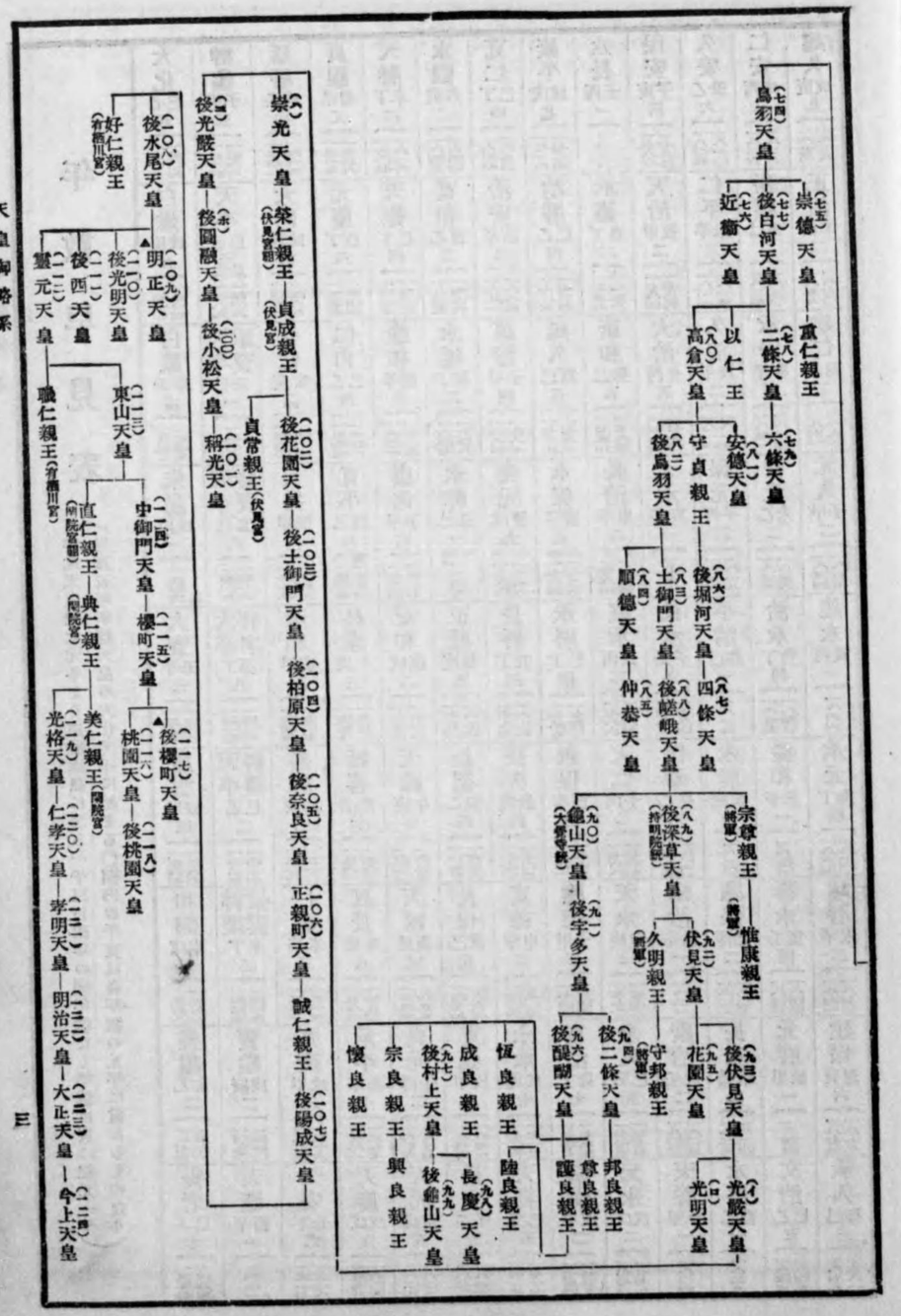
家定（二五一三—二五一八）

二五一五	同	二	
二五一六	同	三	
二五一七	同	四	
二五一八	同	五	

一二二代 明治 二五三七―二五七三	慶喜(二五二七)	二九二七	慶應 三	明治天皇踐祚○勅によりて征長軍を解く○高杉晋作歿す(年二九)○兵庫開港○鹿谷宿陰歿す(年五九)○山内豐信(容堂)大政奉還を將軍に勸告す○討幕の密勅下る○慶喜大政を奉還す○十二月王政復古の大令下る○攝政關白征夷大將軍等の職を廢し新に總裁議定參與の三職を設け親王公卿諸侯諸藩士の中より登庸す
	慶喜(二五二六)	二五二五	慶應 元	露蘭佛英米に神奈川長崎函館にての貿易を令す○安島帶刀橋本左内吉田松陰等刑せらる○三條實萬薨ず(年五八)安藤信正老中となる○始めて使節を西洋に遣はす○水戸浪士井伊直弼を櫻田門外に要擊す○葡國と和親條約を結ぶ○齊昭薨ず(年六一)○慶喜春嶽容堂等の謹慎を解く○普國と條約を締結す
		二五二四	元治 元	水戸浪士下野足利を亂す○飯田忠彦日刃す(年六三)水戸浪士高輪東禪寺に英人を傷く○外國公使館を品川御殿山に設く○和宮將軍に降嫁○再び使節を西洋に遣はす
		二五二三	同 三	英人生麥事件の償金を要求す○將軍入京○賀茂行幸石清水行幸○攘夷期を五月十日と定む○長藩外船砲擊○英人鹿兒島に入寇○攘夷親征の議○大和の變○三條實美等の脫走○生野の變○瑞西と條約を結ぶ
		二五二二	同 二	浪士安藤信正を坂下門に傷く○島津久光入京す○寺田屋の變○勅使大原重德東下す○一橋慶喜後見に松平春嶽總裁職に各任ず○生麥の變○參勤交代を緩む○蘭國へ留學生を派す○勅使三條實美東下す○大橋順藏歿す(年四七)
	家茂(二五一八 二五二六)	二五二一	文久 元	水戸浪士下野足利を亂す○飯田忠彦日刃す(年六三)水戸浪士高輪東禪寺に英人を傷く○外國公使館を品川御殿山に設く○和宮將軍に降嫁○再び使節を西洋に遣はす
		二五二〇	萬延 元	櫻田門外に要擊す○葡國と和親條約を結ぶ○齊昭薨ず(年六一)○慶喜春嶽容堂等の謹慎を解く○普國と條約を締結す
		二五一九	安政 六	露蘭佛英米に神奈川長崎函館にての貿易を令す○安島帶刀橋本左内吉田松陰等刑せらる○三條實萬薨ず(年五八)




繼體天皇
安閑天皇
宣化天皇
欽明天皇
敏達天皇
用明天皇
崇峻天皇
推古天皇
押坂彦人大兄皇子
聖德太子
山背大兄王
殖栗皇子
茅渟王
明天皇
皇極天皇
齊明天皇
孝德天皇
有間皇子
天智天皇
古人大兄皇子
天武天皇
持統天皇
弘文天皇
元明天皇
施基皇子
草壁皇子
大津皇子
舍人親王
淳仁天皇
忍壁親王
元正天皇
文武天皇
聖武天皇
孝謙天皇
稱德天皇
平城天皇
阿保親王
光仁天皇
桓武天皇
嵯峨天皇
仁明天皇
文德天皇
惟喬親王
淳和天皇
恆貞親王
光孝天皇
宇多天皇
清和天皇
陽成天皇
貞純親王
葛原親王
萬多親王
醍醐天皇
朱雀天皇
冷泉天皇
花山天皇
齊世親王
村上天皇
爲平親王
圓融天皇
三條天皇
小一條院
一條天皇
後一條天皇
後朱雀天皇
後冷泉天皇
後三條天皇
白河天皇
堀河天皇


崇德天皇
重仁親王
鳥羽天皇
後白河天皇
近衛天皇
二條天皇
六條天皇
以仁王
高倉天皇
安德天皇
守貞親王
後鳥羽天皇
四條天皇
順德天皇
仲恭天皇
土御門天皇
後嵯峨天皇
後堀河天皇
宗尊親王
惟康親王
後深草天皇
龜山天皇
久明親王
守邦親王
後宇多天皇
伏見天皇
後伏見天皇
後二條天皇
後醍醐天皇
花園天皇
光嚴天皇
光明天皇
邦良親王
尊良親王
護良親王
恆良親王
陸良親王
成良親王
長慶天皇
後村上天皇
後龜山天皇
宗良親王
興良親王
懷良親王
崇光天皇
榮仁親王
貞成親王
後花園天皇
後土御門天皇
後柏原天皇
後奈良天皇
正親町天皇
誠仁親王
後陽成天皇
貞常親王
後圓融天皇
後小松天皇
稱光天皇
後光嚴天皇
後水尾天皇
明正天皇
後櫻町天皇
桃園天皇
後桃園天皇
後光明天皇
後四天皇
靈元天皇
好仁親王
職仁親王
東山天皇
中御門天皇
櫻町天皇
直仁親王
典仁親王
美仁親王
光格天皇
仁孝天皇
孝明天皇
明治天皇
大正天皇
今上天皇

年數早見表

（神武天皇紀元元年より皇極天皇に至る一千三百四年の間年號なく年號は實に紀元一千三百五年孝徳天皇の大化元年に始まる○欄內の干支は各年號の元年に當れるものなり）

大化 乙巳 五 (一三〇五—一三〇九)	白雉 庚戌 五 (一三一〇—一三一四)	白鳳 壬申 一四 (一三三二—一三四五)	朱鳥 丙戌 一 (一三四六)	大寶 辛丑 三 (一三六一—一三六三)	慶雲 甲辰 四 (一三六四—一三六七)	和銅 戊申 七 (一三六八—一三七四)	靈龜 乙卯 二 (一三七五—一三七六)	養老 丁巳 七 (一三七七—一三八三)
神龜 甲子 五 (一三八四—一三八八)	天平 己巳 二〇 (一三八九—一四〇八)	天平感寶 己丑 一 (一四〇九)	天平勝寶 己丑 八 (一四〇九—一四一六)	天平寶字 丁酉 八 (一四一七—一四二四)	天平神護 乙巳 二 (一四二五—一四二六)	神護景雲 丁未 三 (一四二七—一四二九)	寶龜 庚戌 一一 (一四三〇—一四四〇)	天應 辛酉 一 (一四四一)
延暦 壬戌 二四 (一四四二—一四六五)	大同 丙戌 四 (一四六六—一四六九)	弘仁 庚寅 一四 (一四七〇—一四八三)	天長 甲辰 一〇 (一四八四—一四九三)	承和 甲寅 一四 (一四九四—一五〇七)	嘉祥 戊辰 三 (一五〇八—一五一〇)	仁壽 辛未 三 (一五一一—一五一三)	齊衡 甲戌 三 (一五一四—一五一六)	天安 丁丑 二 (一五一七—一五一八)
貞觀 己卯 一八 (一五一九—一五三六)	元慶 丁酉 八 (一五三七—一五四四)	仁和 乙巳 四 (一五四五—一五四八)	寛平 己酉 九 (一五四九—一五五七)	昌泰 戊午 三 (一五五八—一五六〇)	延喜 辛酉 二二 (一五六一—一五八二)	延長 癸未 八 (一五八三—一五九〇)	承平 辛卯 七 (一五九一—一五九七)	天慶 戊戌 九 (一五九八—一六〇六)
天暦 丁未 一〇 (一六〇七—一六一六)	天徳 丁巳 四 (一六一七—一六二〇)	應和 辛酉 三 (一六二一—一六二三)	康保 甲子 四 (一六二四—一六二七)	安和 戊辰 二 (一六二八—一六二九)	天祿 庚午 三 (一六三〇—一六三二)	天延 癸酉 三 (一六三三—一六三五)	貞元 丙子 二 (一六三六—一六三七)	天元 戊寅 五 (一六三八—一六四二)
永觀 癸未 二 (一六四三—一六四四)	寛和 乙酉 二 (一六四五—一六四六)	永延 丁亥 二 (一六四七—一六四八)	永祚 己丑 一 (一六四九)	正暦 庚寅 五 (一六五〇—一六五四)	長徳 乙未 四 (一六五五—一六五八)	長保 己亥 五 (一六五九—一六六三)	寛弘 甲辰 八 (一六六四—一六七一)	長和 壬子 五 (一六七二—一六七六)
寛仁 丁巳 四 (一六七七—一六八〇)	治安 辛酉 三 (一六八一—一六八三)	萬壽 甲子 四 (一六八四—一六八七)	長元 戊辰 九 (一六八八—一六九六)	長暦 丁丑 三 (一六九七—一六九九)	長久 庚辰 四 (一七〇〇—一七〇三)	寛徳 甲申 二 (一七〇四—一七〇五)	永承 丙戌 七 (一七〇六—一七一二)	天喜 癸巳 五 (一七一三—一七一七)
康平 戊戌 七 (一七一八—一七二四)	治暦 乙巳 四 (一七二五—一七二八)	延久 己酉 五 (一七二九—一七三三)	承保 甲寅 三 (一七三四—一七三六)	承暦 丁巳 四 (一七三七—一七四〇)	永保 辛酉 三 (一七四一—一七四三)	應徳 甲子 三 (一七四四—一七四六)	寛治 丁卯 七 (一七四七—一七五三)	嘉保 甲戌 二 (一七五四—一七五五)
永長 丙子 一 (一七五六)	承徳 丁丑 二 (一七五七—一七五八)	康和 己卯 五 (一七五九—一七六三)	長治 甲申 二 (一七六四—一七六五)	嘉承 丙戌 二 (一七六六—一七六七)	天仁 戊子 二 (一七六八—一七六九)	天永 庚寅 三 (一七七〇—一七七二)	永久 癸巳 五 (一七七三—一七七七)	元永 戊戌 二 (一七七八—一七七九)
保安 庚子 四 (一七八〇—一七八三)	天治 甲辰 二 (一七八四—一七八五)	大治 丙午 五 (一七八六—一七九〇)	天承 辛亥 一 (一七九一)	長承 壬子 三 (一七九二—一七九四)	保延 乙卯 六 (一七九五—一八〇〇)	永治 辛酉 一 (一八〇一)	康治 壬戌 二 (一八〇二—一八〇三)	天養 甲子 一 (一八〇四)
久安 乙丑 六 (一八〇五—一八一〇)	仁平 辛未 三 (一八一一—一八一三)	久壽 甲戌 二 (一八一四—一八一五)	保元 丙子 三 (一八一六—一八一八)	平治 己卯 一 (一八一九)	永暦 庚辰 一 (一八二〇)	應保 辛巳 二 (一八二一—一八二二)	長寛 癸未 二 (一八二三—一八二四)	永萬 乙酉 一 (一八二五)
仁安 丙戌 三 (一八二六—一八二八)	嘉應 己丑 二 (一八二九—一八三〇)	承安 辛卯 四 (一八三一—一八三四)	安元 乙未 二 (一八三五—一八三六)	治承 丁酉 四 (一八三七—一八四〇)	養和 辛丑 一 (一八四一)	壽永 壬寅 四 (一八四二—一八四五)	元暦 甲辰 一 (一八四四)	文治 乙巳 五 (一八四五—一八四九)
建久 庚戌 九 (一八五〇—一八五八)	正治 己未 二 (一八五九—一八六〇)	建仁 辛酉 三 (一八六一—一八六三)	元久 甲子 二 (一八六四—一八六五)	建永 丙寅 一 (一八六六)	承元 丁卯 四 (一八六七—一八七〇)	建暦 辛未 二 (一八七一—一八七二)	建保 癸酉 六 (一八七三—一八七八)	承久 己卯 三 (一八七九—一八八一)

貞應 壬午 二 (一八八二—一八八三)	元仁 甲申 一 (一八八四)	嘉祿 乙酉 二 (一八八五—一八八六)	安貞 丁亥 二 (一八八七—一八八八)	寛喜 己丑 三 (一八八九—一八九一)	貞永 壬辰 一 (一八九二)	天福 癸巳 一 (一八九三)	文暦 甲午 一 (一八九四)	嘉禎 乙未 三 (一八九五—一八九七)
暦仁 戊戌 一 (一八九八)	延應 己亥 一 (一八九九)	仁治 庚子 三 (一九〇〇—一九〇二)	寛元 癸卯 四 (一九〇三—一九〇六)	寶治 丁未 二 (一九〇七—一九〇八)	建長 己酉 七 (一九〇九—一九一五)	康元 丙辰 一 (一九一六)	正嘉 丁巳 二 (一九一七—一九一八)	正元 己未 一 (一九一九)
文應 庚申 一 (一九二〇)	弘長 辛酉 三 (一九二一—一九二三)	文永 甲子 一一 (一九二四—一九三四)	建治 乙亥 三 (一九三五—一九三七)	弘安 戊寅 一〇 (一九三八—一九四七)	正應 戊子 五 (一九四八—一九五二)	永仁 癸巳 六 (一九五三—一九五八)	正安 己亥 三 (一九五九—一九六一)	乾元 壬寅 一 (一九六二)
嘉元 癸卯 三 (一九六三—一九六五)	徳治 丙午 二 (一九六六—一九六七)	延慶 戊申 三 (一九六八—一九七〇)	應長 辛亥 一 (一九七一)	正和 壬子 五 (一九七二—一九七六)	文保 丁巳 二 (一九七七—一九七八)	元應 己未 二 (一九七九—一九八〇)	元亨 辛酉 三 (一九八一—一九八三)	正中 甲子 二 (一九八四—一九八五)
嘉暦 丙寅 三 (一九八六—一九八八)	元徳 己巳 二 (一九八九—一九九〇)	元弘 辛未 三 (一九九一—一九九三)	正慶 壬申 二 (一九九二—一九九三)	建武 甲戌 二 (一九九四—一九九五)	延元 丙子 四 (一九九六—一九九九)	興國 庚辰 六 (二〇〇〇—二〇〇五)	正平 丙戌 二四 (二〇〇六—二〇二九)	建徳 庚戌 二 (二〇三〇—二〇三一)
文中 壬子 三 (二〇三二—二〇三四)	天授 乙卯 六 (二〇三五—二〇四〇)	弘和 辛酉 三 (二〇四一—二〇四三)	元中 甲子 九 (二〇四四—二〇五二)	北朝	暦應 戊寅 四 (一九九八—二〇〇一)	康永 壬午 三 (二〇〇二—二〇〇四)	貞和 乙酉 五 (二〇〇五—二〇〇九)	觀應 庚寅 二 (二〇一〇—二〇一一)
文和 壬辰 四 (二〇一二—二〇一五)	延文 丙申 五 (二〇一六—二〇二〇)	康安 辛丑 一 (二〇二一)	貞治 壬寅 六 (二〇二二—二〇二七)	應安 戊申 七 (二〇二八—二〇三四)	永和 乙卯 四 (二〇三五—二〇三八)	康暦 己未 二 (二〇三九—二〇四〇)	永徳 辛酉 三 (二〇四一—二〇四三)	至徳 甲子 三 (二〇四四—二〇四六)
嘉慶 丁卯 二 (二〇四七—二〇四八)	康應 己巳 一 (二〇四九)	明徳 庚午 三 (二〇五〇—二〇五二)	明徳 癸酉 二 (二〇五三)	應永 甲戌 三四 (二〇五四—二〇八七)	正長 戊申 一 (二〇八八)	永享 己酉 一二 (二〇八九—二一〇〇)	嘉吉 辛酉 三 (二一〇一—二一〇三)	文安 甲子 五 (二一〇四—二一〇八)
寶徳 己巳 三 (二一〇九—二一一一)	享徳 壬申 三 (二一一二—二一一四)	康正 乙亥 二 (二一一五—二一一六)	長祿 丁丑 三 (二一一七—二一一九)	寛正 庚辰 六 (二一二〇—二一二五)	文正 丙戌 一 (二一二六)	應仁 丁亥 二 (二一二七—二一二八)	文明 己丑 一八 (二一二九—二一四六)	長享 丁未 二 (二一四七—二一四八)
延徳 己酉 三 (二一四九—二一五一)	明應 壬子 九 (二一五二—二一六〇)	文龜 辛酉 三 (二一六一—二一六三)	永正 甲子 一七 (二一六四—二一八〇)	大永 辛巳 七 (二一八一—二一八七)	享祿 戊子 四 (二一八八—二一九一)	天文 壬辰 二三 (二一九二—二二一四)	弘治 乙卯 三 (二二一五—二二一七)	永祿 戊午 一二 (二二一八—二二二九)
元龜 庚午 三 (二二三〇—二二三二)	天正 癸酉 一九 (二二三三—二二五一)	文祿 壬辰 四 (二二五二—二二五五)	慶長 丙申 一九 (二二五六—二二七四)	元和 乙卯 九 (二二七五—二二八三)	寛永 甲子 二〇 (二二八四—二三〇三)	正保 甲申 四 (二三〇四—二三〇七)	慶安 戊子 四 (二三〇八—二三一一)	承應 壬辰 三 (二三一二—二三一四)
明暦 乙未 三 (二三一五—二三一七)	萬治 戊戌 三 (二三一八—二三二〇)	寛文 辛丑 一二 (二三二一—二三三二)	延寶 癸丑 八 (二三三三—二三四〇)	天和 辛酉 三 (二三四一—二三四三)	貞享 甲子 四 (二三四四—二三四七)	元祿 戊辰 一六 (二三四八—二三六三)	寶永 甲申 七 (二三六四—二三七〇)	正徳 辛卯 五 (二三七一—二三七五)
享保 丙申 二〇 (二三七六—二三九五)	元文 丙辰 五 (二三九六—二四〇〇)	寛保 辛酉 三 (二四〇一—二四〇三)	延享 甲子 四 (二四〇四—二四〇七)	寛延 戊辰 三 (二四〇八—二四一〇)	寶暦 辛未 一三 (二四一一—二四二三)	明和 甲申 八 (二四二四—二四三一)	安永 壬辰 九 (二四三二—二四四〇)	天明 辛丑 八 (二四四一—二四四八)
寛政 己酉 一二 (二四四九—二四六〇)	享和 辛酉 三 (二四六一—二四六三)	文化 甲子 一四 (二四六四—二四七七)	文政 戊寅 一二 (二四七八—二四八九)	天保 庚寅 一四 (二四九〇—二五〇三)	弘化 甲辰 四 (二五〇四—二五〇七)	嘉永 戊申 六 (二五〇八—二五一三)	安政 甲寅 六 (二五一四—二五一九)	萬延 庚申 一 (二五二〇)
文久 辛酉 三 (二五二一—二五二三)	元治 甲子 一 (二五二四)	慶應 乙丑 三 (二五二五—二五二七)	明治 戊辰 四五 (二五二八—二五七二)	大正 壬子 一五 (二五七二—二五八六)	昭和 丙寅 二 (二五八六—二五八七)			

二酉社(NIYU-SHA)名に就いて

二酉社を二トリシヤと書いて發せられました電報が延著及び不著のことが屢々あります、又在外同胞諸君よりの註文狀にNitorisha, とあつた爲に配達不能もありました。或は又酉年の者が二人にて經營してるのかと、問ふ人もありますが、決して爾う云ふ意味ではありませぬ。類書纂要に小酉大酉は(二山の名)、古へ辰州府の城西に在り、石穴の中に千卷の書有り、秦人此に到りて學ぶ、仍て良書善本の澤山あるを二酉の書と云ふとあります。私の家では祖先の遺訓が世道人心の裨益に勉めよとありまして代々それを念として來ました出版業に從事致しましたのも其の一端の實現に過ぎませぬ當社主、姓を石倉、名を千次と申まして名實共に相應はしいと思ひまして二酉社と命名し、二酉名著刊行會も設立しました。併し未だ出版書種の少きを恥づる次第であります。

索引

(字音假名遣は便宜のために發音に依りて區別す、例へは外をがい、桓をかん、皇族をこうぞく、とせるが如し。)

あ

安倍貞任の叛 二七八
足利高氏六波羅を陷る 三九九
足利と新田と相對す 四〇四
足利尊氏鎌倉に自立す 四〇六
足利尊氏の人物 四〇九
足利尊氏敗れて九州に走る 四一三
足利尊氏光明天皇を擁立す 四一七
足利尊氏の稅法 四二七
足利時代の武士氣質及其變化の原因 四二九
足利直義と高師直との衝突 四三三
足利直冬同直義同尊氏の黨與相爭ふ 四三四
足利尊氏光嚴帝を立つ 四三五
足利尊氏の死 四三七
足利氏の權執事に移る 四三八
足利氏滿の異圖 四四三
足利義滿天下を一統す 四四四
足利義滿の人物 四四五
足利義滿當時の好尙及美政 四四五
足利義滿明の封册を受く 四四九
足利義滿死し法皇號を贈らる 四五一
足利義敎の勵精 四五三
足利持氏の自立 四五三
足利義政帝王の儀を具ふ 四五八
足利時代の技藝 四五九
足利時代の文學 四六〇
足利義政其室富子 四六四
足利義昭織田信長を忌む 四九五
足利義昭織田信長と戰ひて敗る 四九九
赤松圓心出づ 五九
赤松滿祐將軍義敎を殺す 四九九
赤松氏亡ぶ 五〇〇
朝倉義景 五〇〇
淺井長政 五〇〇
明智光秀織田信長を殺す 五〇六
東常緣 五〇八
愛親覺羅族朝鮮を助けんとす 五一〇
赤穗義士の復仇 五一二
新井君美の出身 五一五
新井君美の硬貨政策 五一五
新井君美將軍を國王とし主權を取らんとす 五一五
淺間山の噴火 五一五
阿部正弘水野忠邦に代る 五一五
阿部正弘荷蘭國の密旨を藏す 五一五
安藤信睦の執政 五一五

い

出雲朝廷と神武天皇一家の抗爭 七五
磐井九州に據つて叛す 八〇一
一向宗獨り榮ゆ 八〇四
伊勢長氏の成功 七五
今川義元亡ぶ 八一一
石田三成の人物及地位 八八
石田　成等德川家康を責む 五五五
石田三成の反間成らず 五五五
石田三成の擧兵 五五九
石田三成德川家康兩軍の形勢 五五〇
石田三成黨の大敗 五六三
池田光政 五六三
異端排擊 六三
異學禁止の令 六三
異船砲擊の令 六三

犬を殺すを禁ず　六二〇
伊藤仁齋　六四四
井伊直弼の大老　七二六
井伊直弼水戸侯以下を屈す　七二七
井伊直弼の人物　七二九
井伊直弼の擅權　七二九
井伊直弼の暗殺　七三四

う

歌垣にて男女相戯ふの風　六六
厩戸皇子の政制革定　九七
宇多天皇藤原基經に謝す　三二九
宇多天皇の賢明　三三一
上杉景虎　四八〇
上杉景虎武田晴信と戰ひ北條氏を攻む　四八四
上杉景勝直江兼續石田三成に黨す　五五八
上杉景勝の舉兵　五五九
上杉景勝以下德川家康に服す　五六六

え　ゑ

蝦夷の背叛　一六〇、一九四
江戸大阪の比較　六四二
江戸の大火　六六二
江戸生活の榮華　六八三
江戸文學の再興　六八三
江戸文學の喜劇的特色　六八四
英國來らんとす　七二六

お　を

大伴族の發達　七二七
大伴物部二氏の爭　七二九
女を座長とするの風　七三四
王制始めて生じ國家始めて成る　六六
大海人皇子の一統　九七
王權衰頽の源因　三二九
大江廣元　三三一
皇子の將軍　三三一
王朝武士黨の反目　四八〇
應仁の大亂　四八四
大内義興京都の權を攬る　五五八
大内義隆亡ぶ　五五九
織田信長　五六六
織田信長今川義元を亡ぼす　五六六
織田信長德川家康と同盟　六六二
織田信長の上洛　六六二
織田信長淺井朝倉兩氏を破る　六六三
織田信長比叡山本願寺の僧兵を敗る　六六三
織田信長基督教を保護す　六六三
織田信長の政治　六八三
織田信長の城郭陣法　六八三
織田信長世風を一變す　六八四
織田信長部下の人物　七〇〇
織田信長の毛利氏征伐　七〇〇
奥羽の豪族　七八〇
大阪方兵を擧ぐ　七八〇
大阪方敗北して和す　七八
大阪方の再興　七六
大奥の婦女政治に容喙す　一一〇
王朝の衝突　一三三
荷蘭の貿易及其制限　一四四
荷蘭國王開國を促がす　三三三
荷蘭國王の密旨　三六八
荻生徂徠　四〇一
大鹽平八郎の亂　四六四
歐洲形勢の變　四七二
歐米通商を求む　四七五

か　が

外人の歸服　四八八
外人襲撃の風　四八八
漢樣の地名　四九一
官位の授與　四九一
柿本人麿　四九一
桓武大皇帝の性質　四九三
桓武天皇の宗教及革弊　五〇〇
桓武天皇の政策　一九六
桓武天皇皇室を平人の上に立つ　一九六
桓武天皇より北條時代に至る宗教の變遷　三六四
鎌倉政府の位地　三三四
鎌倉以前の文學　三五九
鎌倉武士の氣質　三七〇
鎌倉士風を作りし文學　三七三
鎌倉の内亂　三八一
鎌倉氏滿の異圖　四四二
鎌倉の内紛　四五二
金が崎城陷る　四三三
金配り　四三三
海賊　四三九
學問の欠乏　五一四
學問上の人心統一　四三〇
外征軍歸る　六六八
春日局　五四八
海外遠征の雄圖　五八七
寛政當時學問の沿革　五九六
官學私學の爭論　六六八
開國的攘夷黨　六七〇
開國主義の實行　七三二
和宮の降嫁　七三三

き　ぎ

九州女會の勢力　一九六
九州の豪族　三六四
貴族生活の進歩　三三四
貴族僧侶の跋扈　三五九
貴族と寺院平民を厭す　三七〇
貴族の軟弱迷信　三七三
貴族の文彩風物淫蕩の習俗　四四二
貴族食を四方に乞ふて生く　四四二
貴族將軍を擁して功なし　四五二
行基官教に抗す　四三三
吉備眞備欺かる　五一四
舊族地方に去り新族地方より入る　四四九
舊社會解けて新統合生ぜんとす　五二〇
舊社會の聯鎖悉く絶ゆ　六六八
僞善謙退の風朝廷に盛　五四八
契丹九州に來襲す　五八七
清原武衡の叛　五九六
北畠顯家の敗死　六六八
菊池氏の廢亡　六七〇
京都鎌倉の内紛　七二〇
京都の無政府　七三二
京都長州藩士の手に落つ　七三三
驕奢より德政を生ず　七三三
基督教の傳來　七三三
倉歌保護の令　六二〇
木下順庵　六四四

く　ぐ

熊襲は何族か　三〇
百濟衰へて新羅盛　八七
百濟の滅亡　一一七
君民共治の誓言　一一七
藥子仲成の亂　二〇三
藏人の新置　二一八
補正成の現出　九六
補正成の敗北　一八三
補正行　二〇九
補正の降服儀　四七〇
公卿と武士と相對す　四九六
公卿足利義滿に鋒附す　三三四
公卿江戸に鋒附す　三六四
熊澤蕃山　四〇
群黨田沼意次を攻む　五六八、六一三
群黨井伊直弼を攻む　六五九
群黨井伊直弼を攻む　七二〇

け　げ

血族を重んずる古風　一一
景行天皇九州を征す　一六
權臣の跋扈　三三

顯宗天皇の即位　六四
玄昉橘藤原兩氏に抗す　一六七
檢非遣使の新置　二一八
源氏の發達及其特性　二九〇
源氏の平氏に凌がれし所以　三〇一
元の勃興　三四四
元寇の第一回　三五六
元軍風濤に逢ふて歸る　三七七
元寇の第二回顛覆す　三七九
京畿の戰　四一八
京師荒廢して公卿四散す　四六九
建武式目　四三七
藝能の人士林に列す　六一七
元祿武士の氣風　六三五

こご

皇族及武内大伴二族の發達　三八
皇族鎌倉に媚附す　三六八
皇族人物を出す　三六四
皇族兩派相陷擠す　三五五
後宮勢力の發達　七六
古來の名族悉く絶え蘇我氏昌ゆ　九六
國民的精神の勃發及存在の確定　二四
國民始めて參政を知る　一三〇
國民の性情一變す　二六八
國民の氣風習俗及法律道德　六四
國民の自覺　一六七
高麗の滅亡　二一八
古事記の編纂　二九〇
光明子皇后となり后位の變化　三〇一
金銅盧遮那佛生ず　三四四
光仁天皇の擁立　三五六
剛膽なる諸藤　三七七
豪族上下を欺く　三七九
豪族發達して武門をなす　四一八
豪族北條氏に背く　四六九
豪族自ら擅にす　四三七
諸榮すべき大皇帝　六一七
後三條天皇藤原氏の權を抑ふ　六三五
後白河法皇源義仲を厭ふ　三八
後白河法皇源義仲を排せんとして敗る　三六八
後鳥羽上皇鎌倉政府を覆さんとす　三六四
五攝家生じ皇子將軍となる　三五五
皇室の爭奪　七六
皇位有期の閑職となる　九六
後醍醐天皇出づ　二四
後醍醐天皇寺院に賴つて北條氏を誅る　一三〇
後醍醐天皇蒙塵を恐れて脫奔す　二六八
後醍醐天皇隱岐に遷さる　三五三
後醍醐天皇と尊氏と相對す　六四七
後醍醐天皇尊氏を除かんとす　一二六
後醍醐天皇尊氏と和す　一四九
後醍醐天皇遁れて吉野に藏くる　一六二
後醍醐天皇の崩御　一六九
後醍醐天皇何故に敗れし乎　一八二
混闘十一年　一八五
小西行長平壤を取る　一九一
小西行長明軍を破る　二七四
五人組の制　三九六
後水尾帝德川氏を憤る　四一九
皇親を將軍とするの議　四四二
硬貨の制　二〇〇
考證學　二八〇
光格天皇の生父尊號の議　三一九
國防の經營　三三三
國家なる理想の現出　三四九
公武合體黨　三六八
三六一

さ

三韓文明の風化　三五
三韓の服屬　四三
三韓征伐の國民生活に及せし結果　四五
三韓の背叛　六〇
三韓益日本に遠ざかる　七二
坂上氏起つて藤原氏と抗す　二〇三
陰の豪族　四六〇
佐々上杉島津德川諸氏豐臣秀吉に服屬　三二四
再度の外征諸侯功なし　三五八
佐竹義宣石田三成に同盟す　三六九
產業の進歩　四六八
酒井忠清の專權　四〇九
佐久間修理の監禁　七〇
鎖國的攘夷黨　七二
佐幕黨　七三
薩長權を爭ふ　七四〇
薩摩の公武合體說　七三三

しじ

神武天皇の系統　七四
神武天皇の東征　八
神武天皇時代の國民生活　一三
宗教心の激變　一八
宗教の勢力盛にして信仰衰ふ　三三
神功皇后仲哀天皇を促がして三韓を征す　四〇
支那文明の侵漸　四九
支那經典國民の心性を和らぐ　三一
支那侵略の雄圖　三七九
支那貿易　四九
社會の變革姓氏の混亂　五六
社會解體せんとす　一三七
社會組織變革して國守の權衰る　四〇
社會經濟上の紛亂　三二四
社會亂離の勢成る　三三三
社會の新結合力　三五八
社會の行樂　三六九
社會的進歩　四〇八
臣下天皇を作る　四〇九
新羅百濟日本に離畔す　七二〇
新羅名分上日本に離畔す　七三二
壬申の亂　七四〇
壬申兩軍の兵勢　七五八
壬申の亂の結果　七
持統天皇の治世　八
聖武天皇頃大官の所得及人民の負擔　一三
聖武天皇の奢侈迷信　一八
神佛の混交　三二
女皇等僧侶政府を作る　四〇
藤原光仁天皇の擁立　四九
小黨の敗北　五一
小黨の滅亡　三七九
社交の發達風流の進歩　四九
寺院武力を養ひて朝廷に抗す　五六
寺院朝廷に迫る　一三七
寺院の武力再發して數諸侯に西敵す　二〇五
白河天皇の佞佛と政治寺院の弊害　二〇七
白河法皇の驕縱噴火山に躍躍す　三一一
神器を有せざる天皇　四九七
貞永式目　三三〇
思想文學の變と政治との關係　六三
將軍宗尊親王廢せらる　七〇
人心王政を厭ふ　七五
人心の沈睡　七一
人心の沸騰　一二八
人心幕府に服せず　一三一
城下の發達　一三三
新民幅興の勢極まる　一三九
諸侯の誓文　一五五
諸侯の紛爭　一六一
諸侯學に向ふ　一七一
諸侯商賈に負債す　一七四
紹巴　一八二
沈惟敬小西行長と和を議す　二二三
沈惟敬の詐僞現はる　四九六
銷武學手段　二四九
士農衣服の制禁　二七五
島原の教徒兵を集ぐ　二七九
島原亂徒の敗北　四八二
信仰試驗の酷刑　五八五
遲緩の日本人　一八〇

神道の隆盛　六一四
市府村落を呑む　六四〇
市府抑制策　六五四
市府の發達　六六二
儒佛の爭一變して儒林相互の伐となる　六四四
上下醉生夢死の時　六五三
士風の三變　六五六
心學　六六八
人民の自立　六八二
處士横議の兆　七〇一
攘夷黨の閉息　七三〇

すず

隋朝との交通　一〇一
菅原道眞　二三三
菅原道眞の貶斥　二三四
駿河の今川氏　四四五

せ

世界の二大文明日本に混化す　三
征戰の危機　三五
姓氏の混亂　三八
生産法制の進歩　一四一
制度益備はる　一四三
政制の紛亂　一九一
政制漸く變じ藏人檢非違使を生ず　二一四
生活風俗の變　二四〇
戰爭地方的となる　二五四
戰亂何故に收まらざるか　二六二
戰術の變遷　二六三
政權下に移る　二五六
政權側用人に移る　二六八
西洋諸國との交通　二八二
征明軍の部署　七〇一
征韓諸將の不和　七三〇
關ヶ原の戰　二四〇
政治的冒險者の擧出　二四三
折衷學　二四五
世子の爭　二九一

そぞ

族長制度の發達　三八
蘇我氏の專横　三〇
蘇我氏の滅亡　三三
僧侶の跋扈　三五
僧侶政府　三八
僧侶政府太政官を呑む　四二
僧侶跋扈して武人を苦しむ　四三
僧侶遂兵となる　四四
僧侶再び武力を生ず　四九
僧侶の殊寵　六三〇
宋學武士の學となる　五四六
壯士の現出　七一八
尊王攘夷論の現出　七二四

ただ

太古史に現はれたる日本　一
武内宿禰の東夷討伐　三三
武内族の發達　三六
大化革新前の國狀　一〇四
大化の國政變革　一一〇
大化革新の主義及要目　一一一
大化前後國民の生活及思想　一二三
大化以來の一大變革　三三
大寶令の制定　一四三
橘藤原兩氏の玄昉と對抗　一六四
男女命名の風一變す　二一八
平將門の叛　二四三
平清盛の政策　三〇四
平清盛死し平氏衰ふ　三一三
大將軍は北方の皇位　四四
武田晴信の人物　四四六
武田晴信の軍隊及其政治　四四八
武田北條今川三氏の同盟　五〇八
武田氏の滅亡　五〇三
大俣崛起の運　五〇五
伊達政宗の胆服　五一七
泰平の空氣德川秀忠の女を女御とす　五八六
男色の少年　六一七
大農小農を呑む　六四〇
田沼意次　六五四
田沼意次の外藩授引策　六五七
田沼意次の收斂　六五九
田沼意次の失落　六六二
竹内式部　六七七
對外策問　七〇三
脫藩人の擧出　七一三
第二の關ヶ原　七一四

ち

地名に漢樣名を附す　一四八
貯錢稻賣者に官位授與　一五〇
地方豪族發達して武門をなす　二七四
中宮藤原廉子政治に與る　三八
朝廷武士と結びて鎌倉を覆さんとす　三九
朝廷幕府を苦しましむ　四九
忠戰心の發芽　五一
朝鮮の微弱　五三
朝鮮の土寇起る　五七
朝鮮抄掠の爲に衰ふ　五〇
朝鮮使節待遇の改禮　五九
忠義の風町人の間に生ず　五八

てて

天智天皇の性情　六四〇
天智天皇大海皇子と適はず　六五四
天武天皇前後社會の進歩　六五九
天武天皇の改革　六六二
天武天皇神佛を信ず　六七七
出羽の夷俘清原武衡叛す　七〇三
天下大亂の兆　七一三
天下鎌倉を謳歌す　七一四
天皇の御謀　七一四
天皇崩じて葬むるの財なし　一四八
田制の改革　一五〇
天災地變　二七四
天明の大飢饉　三八
天保の飢饉　三八二

とど

土人の血皇室に入る　七二四
奴隸の制度　四九七
奴隸の全滅　五三一
東北蝦夷の侵略　五三七
東北諸豪豐臣秀吉に來附す　五四一
唐百濟を滅ぼす　六三五
唐との戰　六五四
土地國有法破る　一四〇
道鏡大臣禪師となる　一四四
道鏡の人物及地位　一四六
道鏡皇位を望む　一五六
盜賊蜂起し外敵來らんとす　一五三
德政を生ず　一五六
德川家康　一五六
德川家康織田氏に當し豐臣秀吉と戰ふ　二八五
德川家康の人物及位地　二九五
德川家康の敵手　三三
德川家康の擅私　三三
德川家康上杉景勝を攻めんとす　七一
德川家康の蹉躓　三一八
德川家康の開府と將軍任　三二
德川家康淀君を激發す　六八二
德川家康の法令　六九二
德川時代の憲法　七二四
德川家康の一統政略と其功過　四九七
德川家康の死　一二
德川府中の騷爭　三一
德川家光諸侯を臣とす　三九
德川家光の上洛　一一八
東北諸豪豐臣秀吉に來附す　五四一
唐百濟を滅ぼす　六三五
土地國有法破る　六五四
道鏡大臣禪師となる　一四〇
道鏡の人物及地位　一四四
道鏡皇位を望む　一四六
盜賊蜂起し外敵來らんとす　一五三
德政を生ず　一五六
德川家康　一五六
德川家康織田氏に當し豐臣秀吉と戰ふ　二八五
德川家康の人物及位地　二九五
德川家康の敵手　三三
德川家康の擅私　三三
德川家康上杉景勝を攻めんとす　七一
德川家康の蹉躓　三一八
德川家康の開府と將軍任　三二
德川家康淀君を激發す　六八二
德川家康の法令　六九二
德川時代の憲法　七二四
德川家康の一統政略と其功過　四九七
德川家康の死　一二
德川府中の騷爭　三一
德川家光諸侯を臣とす　三九
德川家光の上洛　一一八

徳川武士の氣質　六〇〇
徳川時代の生活美術行樂工藝の進歩　六〇二
徳川家綱將軍となる　六〇四
徳川綱吉の迎立　六〇八
徳川綱吉學を好む　六一一
徳川綱吉時代の學者　六一六
徳川綱吉の禁奢令　六二三
徳川綱吉の驕奢濫費　六二三
徳川時代の貿易財政の狀態　六二三
徳川綱吉の死　六二五
徳川家宣立ちて綱吉の非政を改む　六二八
徳川家宣の死　六三三
徳川吉宗出でて家宣の政を破る　六三六
徳川吉宗尙武の古風を起さんとす　六三九
徳川時代の史學　六四七
徳川時代の和歌　六四七
徳川時代の戲曲　六四七
徳川時代の俗歌　六四七
徳川吉宗幕府の規模を縮少す　六四九
徳川家齊退く　六九三
徳川家慶立つ　六九三
徳川幕府の自業　七〇六
徳川幕府內外政策の矛盾　七一五
徳川幕府政策開國に決す　七一七
徳川家茂の世子　七二六
徳川家茂將軍となる　七二九
徳川幕府凋して政權朝廷に歸す　七三八
豐臣秀吉の人物及位地　七四三
豐臣秀吉高松城を取り毛利氏と和す　七五八
豐臣秀吉明智光秀を滅ぼす　七五九
豐臣秀吉反對黨を滅ぼし天下を取る　七六〇
豐臣秀吉關白となる　七六一
豐臣秀吉の金配　七六一
豐臣氏當時の經濟事情　七六三
豐臣秀吉基督教を抑へんとす　七六五
豐臣秀吉明を征せんとす　七六八
豐臣秀吉子を失ふ　七七〇
豐臣秀吉外征の議を決す　七七二
豐臣秀吉の親軍軍容　七七五
豐臣秀吉援兵を發す　七七五
豐臣秀吉兵力不足に泣く　七七七
豐臣秀吉の意氣衰ふ　七七七
豐臣秀賴生る　七七九
豐臣秀次誅さる　七八〇
豐臣秀吉の死　七八二
豐臣秀賴淀君の自殺　七八六
東常緣　七八七
外樣大名の夷滅　七八七
外樣大名自立の志あり　七八七
討幕黨　七八九
討幕論起る　七九五

な

中大兄皇子中臣鎌足等蘇我氏を滅ぼす　七〇四
南蠻の歸服　一〇四
平城遷都　一〇八
平城時代の文學の發達　一六五
平城時代當初の國民思想　一八八
平城時代當初の國民生活　一八八
平城時代の貴族と寺院平民を壓す　一九〇
南人の貴族的王朝主義　三七三
南人と北人と相對す　四〇四
南人北人疲勞して新勢力中央諸州に生ず　四七四
南人の戀愛思想北人を感化す　六四三
南北の武力平均す　三八四
南北兩朝の混一　四四四
南軍北帝を執ふ　四三五
中江藤樹　三九八
鍋島侯の不服　六九五

に

日本南島文明の差異ある所以　四
日本に於ける支那文明の敗北　五
日本新羅を攻めて大敗す　八
日本唐と戰ひて敗る　一二
日本書紀の編纂　一四九
日本文學の確定　一六五
日本通商條約　七一九
新田義貞出づ　三九六
新田義貞鎌倉を覆す　四〇〇
新田義貞足利尊氏を征す　四〇七
新田義貞の位地　四〇九
新田義貞北國に逃る　四一八
新田義貞の人物　四二〇
新田義貞の敗死　四二四
新田義宗の敗死　四三九
日明兩國兵を退く　四五一
肉慾の天國　六四二・六八三
日米條約の批准　七二六

ぬ

拔荷の風を生ず　六四六

ね

根來僧兵の降服　六四六

の

農民諸侯に反抗す　四二三

は

始めて租稅を收む　一四九
隼人の背叛　一六五
畠山氏將軍を制す　七一九
畠山細川兩氏の爭奪　三九六
林羅山　四〇〇
林子平　四〇七
幕府衰亡の發端　四〇九
幕府を危くす　四一八
幕府財政の窮乏　四二〇
幕府養子政策　四二四
幕府遂に政權を朝廷に歸す　四三九
豐社の獄　四五一
ハルリス延見の禮　六四三・六八三
ハルリスの外交顧問　七二六

ひ

標本的日本婦人　六四六
非改革の運動　尾大不振の勢　四二三
廟議開國に決す　四二三
平野二郎討幕の議を上る　四二三

ふ

武器と帝位を更ゆ　六四六
物質的進步　四二三
佛教の護持　一
佛教の採否進步保守兩黨の爭　一八〇
佛教貴族に行はる　四七七
藤原氏始めて皇室の外戚となる　四七一
藤原氏の權朝野に繁殖す　四七八
藤原氏の隆盛と諸王　四七五
藤原廣嗣の反　六六六
藤原仲麿諸族を壓す　六七二
藤原仲麿政體を變革す　六七七
藤原仲麿新羅を討たんとす　六八八
藤原百川皇后太子を廢す　七三八
藤原氏遂に大權を握る　六九五
藤原基經陽成帝を廢す　七一七
藤原時平制度の匡正を企つ　七一九
藤原時平の人物及政策　七一九
藤原純友の叛　七一九
藤原兼通圓融天皇に迫り關白を得　六三九
藤原兼家圓融天皇に禪位を迫る　六三九
藤原兼家花山天皇に帝位を捨てしむ　六六四
藤原道長出で藤原氏權勢前絕後　七三五
藤原道長三條天皇及太子に讓位を迫る　七三七
藤原泰衡亡ぶ　一六
藤原鎌子政治に與る　三六
藤原　嵩　六三
風流の進步　三六

福原の遷都　三〇九
文武兩黨の爭　三四一
武士北條氏の命を奉ぜず　三九一
文教の興隆　五七六
不形儀の改易　五八九
文學の保護　六一八
富力武力を呑む　六四〇
譜第制度の缺點　六五三
譜第の徹覇　六九〇
佛艦琉球に來る　七〇一
藤田東湖の人物　七一五
踏繪令の廢止　七一九

へ　べ

邊境の民王化に服せず　一六
平群族の專權　六五
平群衰へて大伴起る　六七
兵農區分の發端　一六〇
兵農の分別　四九九
平安時代の宗教思想　二一〇
平安時代の文學　二二三
平安時代の和歌　二八四
平氏の特性　二九〇
平氏に非らざる者人に非ず　三〇三
平氏顚覆の陰謀　三〇四
平氏の地位　三〇四
平氏富士川に敗る　三一五
平氏寺院を敵とす　三二四
平氏海上の權を執る　三三〇
平氏の族滅　三三六
平治の亂　二九八
兵力足らずして豐臣秀吉泣く　五二四
北京の狼狽　五五六
平民の勢力　六六四
ペルリー開國を迫る　七〇四

ほ　ぼ

北狄南蠻の歸服　一四〇
北狄雛租と大擧して叛く　一九八
法制の進歩　一四一
本地垂迹說起る　一六九
北征北人を蝟起せしむ　二〇〇
保元の亂　二九五
保元の亂平治の亂を生む　二九八
北條時政將軍廢立を謀る　三四五
北條泰時の政治　三五六
北條泰時の死去　三六六
北條經時將軍藤原賴經を廢す　三六七
北條時宗元使を追ふ　三七四
北條氏民心を失ふ　三八四
北條高時の失政と驕奢　三八八
北條氏政の降服　五一七
北人の武斷的民政主義　三五五
北人の政治思想は時代の精神　四一一
北軍戰志なし　三九六
北行京軍の困危　四三〇
北朝强臣の叛覆　四三七
細川賴之の善政　四三九
細川賴之黜けらる　四四二
細川忠興石田三成の館を破る　五五五
封建成つて平人安康　五六九
封建の効　六六二
封建治下の自治制　六八八
封建內容の崩壞　六八八
封建制度の中心力消滅す　七一〇
本多正純放たる　五八七
堀田正俊の重農政策　六一〇
堀田正俊殺さる　六一七
堀田正篤出づ　五七一
保科正之　六一五
貿易財政の狀態　六二二

ま

政子と義時　三四八
間部詮勝　六四〇
間部詮勝の浪士掃蕩　七三〇
松平定信　六六四
松平定信の復古政策　六六四
松平定信の墜落　六七七
松平定信と田沼意次との比較　六七七
松平信明の執政　六七七

み

任那日本に屬す　一六
任那回復の政策　七九
源高明源滿仲等廢立を謀る　二五三
源賴政兵を起す　三〇八
源賴政の敗死　三〇九
源賴朝兵を擧ぐ　三一〇
源賴朝鎌倉に據る　三一二
源義仲起る　三一二
源賴朝源義仲と爭ふ　三一六
源義仲平氏を追ふ　三一八
源義仲の末路及人物　三二五
源賴朝源義經を除かんとす　三二八
源賴朝寺社公卿と調和す　三三〇
源賴朝政制を一變して大權を攬る　三三一
源賴朝と大江廣元　三三五
源義經亡ぶ　三三八
源賴朝死し鎌倉の基礎動く　三三九
源賴家幽せらる　三四四
源實朝暗殺せらる　三四七
三浦氏の敗　三六八
三好松永の徒將軍義輝を殺す　四八九
民戶の武器を收めて大佛を作る　五一八
明の國狀　五三一
明軍の大敗　五三七
明との和議再起す　五三九
明の覆亡　五九七
明の遺臣援兵を乞ふ　五九七
明學の感化　六一五
明音の勢力　六四四
水戶の學風　六一五
水野忠邦出づ　六九三
水野忠邦外船擊攘政略　九
水野忠邦の勤儉政治　六九七
水野忠邦の財政改革　六九七
水野忠邦の人物と其敗北　六九七

む

陸奧の蝦夷また動亂す　二三八

め

明和の大疫癘　六六二

も

物部中臣兩氏聯結して蘇我氏と爭ふ　六三
物部中臣兩氏の大敗　九四
文武天皇の卽位　一四五
毛利氏著はる　四八七
毛利氏征伐　五〇〇

や

大和朝廷權力の發達　二〇
日本武尊の熊襲征伐　三一
山名氏亡び細川氏榮ゆ　四四五
山名細川の二氏大　四五七
耶蘇教徒の大迫害　五九三
山崎闇齋　六一三
柳澤吉保の寵任　六一八
柳澤吉保文學を保護す　六一八
山縣大貳　六五七

ゆ

雄略武烈兩天皇の無限君權　七四
由井正雪　六〇五
由井正雪敗る　六〇四
勇進的開國黨　七二〇

よ

淀君出づ　一四一
淀君の人物　一五〇
吉田寅次郎の監禁　一七九

ら

亂離の兆村上天皇の時に現はる　二三一
らつば　二四九
亂民の暴發　六九二
蘭學の起原　六九五

り

兩皇族相爭ふ　一四
兩軍の兵勢　一三一
利害の佛教變じて厭世教となる　二一〇
李如松平壤を取る　三三七
林子平　六七五

る

呂宋の入貢　三三六

れ

列藩會議にて幕府を制せんとす　三四一

ろ

浪人の抱負　三五〇
浪人減じて遊俠の徒興る　三九九

わ

浪士外人を襲ふ　二三一
露西亞の勃興　四四九
露西亞東下の歴史　六九二
露人北邊に寇す　六九五
露人對馬を占領す　一四
露國との交誼　一三一
忘れられたる四百年間の記事　二一〇
我軍新羅を攻めて大敗す　三三七
和文の發達　六七五
和田義盛北條氏に反抗して敗る　三三六
和田氏及興良親王の降服　三三七
和寇起つて支那朝鮮を犯す　四四七
和寇の猖獗　三三一
和議再び起る　三三三
和漢學の狀態　六四三
和學の研究　六四三
和親條約の締結　七〇六

索引終

二千五百年史に對する評論一斑

東京日日新聞

「眞に世運推移の原を推し、古人未發の理を闡きし者獨り新井白石を然りとなす。然かも白石は幕府の祿に衣食する者、其の觀察の動もすれば私偏を免れざる者あり、維新以後文運の降盛と共に史書の出る甚だ多し、然れども未だ曾て善く其の體を得たるものあるを見ず、此の二千五百年史の出づるに及んで始めて渴を醫するを得たり。蓋し題して二千五百年史と謂ふ其の名已に甚だ壯なり、頁數無慮八百餘其の大なる亦想ふべし、最初より最終に至るまで文氣一貫脉絡整々些の挫折なく、體は記事本末の粹を得て極めて法度あり、行文の飛動、才想富贍眼光烱々善く事物の表裏を看破す、直に白石の讀史餘論の後繼たらむとする者本書の價値は著者の抱負と共に大なるは言を待たず」

國民新聞

「八百頁の大册近來有數の著述たり、而して其の多事の際零細の時間に成りしことを思へば氏が才の非凡なるを知るに足る、吾人の敬服する所は氏が善く史上の大所要所を看取して過またざるに在り」

早稲田文學

「材料の豐富、文章の明快、體裁の整備及び浩瀚なるに於て近年稀に見るの好日本史也。自ら造詣する所深く用意また周到なるを見るべし、其の體裁の秩然たる一斑を擧ぐれば每節の標題を輪廓に圍みて索引に便し本文に悉し雖き枝葉の記事若くは註疏を要する事柄をば欄外に揭げたるなど讀者に取りて至大の便利なり」

太陽

「選麗明快人をして倦まざらしむる書き振り目出たしと云ふべし堂々たる大作、著者の健腕慥に見受け申す、もし世に最も完全なる人類歴史存在するの日あらばそは必ず其の形式に於て理想主義の歴史なるべきを確言するものなり吾等は其の形式の理想的なるの點に於て已に此の書を歓迎するものなり。吾等は此の書によりて竹越君の我が邦史家の未だ企て及ばざりし形式によりて我が國史を闡明せんとしたるの偉勳は、決して沒すべからざるものなりと思ふ」

外交時報

「竹越氏は例へばマコーレー卿の如し。政治家としての氏に服する者も、また服せざる者も論客としての氏を大なりとせざるは一人もあらざらん。氏の二千五百年史の如きこれをマコーレー卿の英國史に比ぶればその着眼の奇警にして文辭の雄麗なる點に於ては兩者その趣を等うす、然もその批評の正しさに至ては遙に彼に優る」

中央新聞

史家の職分は單に時代の變遷推移を文字に現はして羅列するのみならず其原因結果を觀察討究して之を描寫し批判せざるべからず史書にして單に記錄に留めなば蓋し無味枯淡之に過ぐるもの無かるべし我が史學界必らずしも信ずべき史乘記錄に乏しからず開闢以來二千五百年の歴史を記せるもの亦其數算ふるに遑あらず然も能く史書として其價値を損することなく不朽の聲價を保つものは稀なり會々之有りとするも多く專門に走りて一般讀書子の渴を醫すべきもの無し。唯幾に三叉氏の二千五百年史あり從來の歴史の鎖疇を脫し新しき研究と鑑識とを以て我が二千五百年の歴史を傳へり然して氏が炬の如き史眼に照して之を批判せり此の如きは從來曾て見ざる處、文人之を能くせず史家之を行はず、史家ならぬ史家三叉氏に依りて成せられたるを慰

二千五百年史に對する評論一斑

へば其の勞や眞に多とすべき也。更に補綴訂正して梓に上す江湖の讀書子定めて其の渴を醫する思ひあるべし。（大正五年四月三十日）

時事新報 增補訂正成り新裝して現はれ來る、時代の出來事を年代記的に記述し來るかさらずは古文書の綴り合せに過ぎざる歷史書のみ多き世に斯る新意ある記述と大膽爛拔なる批評眼が當時一世の注目を集めし如く今日亦た依然として史界特種の位置を占むべきは當然の事なり、此書に見るべきは此長篇を一貫せる氏一家の精透なる文明批評的見地なり、高邁なる經世的眼光なり、假令へば何處までも實力を權威として名分を排斥したる如きも之が日本史なるだけに殊に目立てる着眼として感ぜらる、而も文章の輕俊なる人物批評の靈活にして飛躍せる讀來りて興味橫逸を舍つるに忍びざらしむるものあり。（大正五年五月二日）

讀賣新聞 本書の價値につきては世既に定評あり、多く蛇足を加ふるの必要なしと雖、本版には幾多の增補訂正を加へ一層の精確と一段の光彩とを添へて益々他に見るべからざる長所を發揮す、二昔を經たる今日尙依然として名著たるを失はず、單に讀物としても類書の群を拔けり。（大正五年五月三日）

中外商業新報 三叉の文名を成さしめたるは本書也其史眼の卓越せると其情趣ある筆致とは世既に定評あり今更に之を說くの要なきも他の史家と其類を異にし單に事實の羅列にのみ專らにせず我國民の生活思想の變遷を究め之に依りて事物の因果を闡明し高等批評眼を以て史實を說述せる達識は頗る推賞せざる可からざる處なり殊に增補訂正に依りて一段の光彩を添へたると云ふ迄もなく附錄として年代表、年數早見表、索引等を加へたるは讀者に對し最も忠實にして而も最も便利なる用意也。勞頓又堅牢優美座右の珍とし常に熟讀玩味せんか深く國史に通じ日本國民性を了解して獲る處決して鮮少ならざるべし。（大正五年五月二十日）

東京日日新聞 二千五百年史一度出でゝ史界爲に聳動し三叉氏は一躍史學界の權威として囑目せらるゝに至れり其犀利なる筆致、徹底せる史眼は實に能く阿世學者の心膽を寒からしめたるものなり今回增補訂正再び世に問ふ處あり之を手にして轉た今昔の感に堪へざるものあり吾人は史學研究者に必讀を薦むると共に何人に向つても亦一讀を慫慂するものなり。（大正五、五、二四）

報知新聞 著者三叉氏なして史眼文名を一代に走せしめたる舊刊を更に訂正增補したるもの、此の書が他の幾多の史書に比して一大特色をなせるは叙事の方式を一變したるにあり、著者は主として國民生活と時代思想に着眼し、二千五百年間の進歩と各時代の隆替を髣髴せしむ、二千五百年史は人物史にあらずして思想史なり、年代記にあらずして生活史なり、本書の特色茲に存す。（大正五年五月二十九日）

東京朝日新聞 著者は所謂國史學者にあらず、しかも能く歐米歷史家の述作により本邦國史の體系の上に一新考案を要することを感知し終に其の精力と文章とは「二千五百年史」に於て大なる成功を贏ち得たり、此一たび世に出づるや一時洛陽の紙價を貴からしめたるの概ありき、本書は更に之に大なる增補訂正を加へたるものにして所謂專門歷史家の病弊に墮ちず光彩ある流麗の筆致の下に成れる此の書が一般讀書子を滿足せしむべきことは今尙ほ舊の知きを疑はざる也。（大正五年五月三十一日）以上月日順）

明治二十九年五月廿八日 開拓社版發行
明治四十二年十月十日 第十九版發行
神武天皇二千五百年式年祭記念增訂改版
大正五年四月一日 二酉社版印刷
大正五年四月三日 二酉社版發行
大正七年十月廿五日 第一版發行
大正十年三月十五日 第二版發行
大正十年十二月五日 第三版發行
大正十三年十一月三日 第四版發行
大正十四年十二月二十日 第五版發行
大正十六年十一月二日 第六版發行
大正十七年十二月二日 第七版發行
大正十五年十一月二日 第八版發行

大正十五年十月五日 第九版發行
昭和元年十二月廿七日 訂正印刷
昭和二年一月二日 第十版發行

昭和二年版 增補訂正 二千五百年史奥附

著作者 竹越與三郎
東京市牛込區拂方町三十五番地
編輯兼發行者 石倉千次
東京市麴町區紀尾井町三番地
印刷者 福王俊祺
東京市麴町區紀尾井町三番地
印刷所 東京印刷株式會社麴町出張所
東京市牛込區拂方町奥元帥邸橫通
發行所 二酉社（ニイウシヤ）內 二酉名著刊行會
二酉社の電話番號 東京四七一〇〇番

定價金七圓五拾錢

何人も此の哲理的修養あるを要す

竹越三叉先生著

惜春雜話

上製四六判天金全壹冊

我が實業界の元勳澁澤子爵本書を評して曰、眞に是れ會心の著なり予も亦同一意見を有すること久し、然も三叉氏が二十年來の主義信念なりと聞くに及んで敬服を禁ずる能はず、三叉氏は主として藝術心及政治的功名心を說かれし爲、實業界の人々は本書を雲烟過眼視せるの觀あるも、是を熟讀翫味して商業家は商業的功名心を、工業家は工業的功名心を涵養せば胸中自から無限の活氣を生じ眞に意義ある生活を送るを得べしと確信す。敢て實業家諸氏に繙讀を薦む。

定價金貳圓送料十八錢

二千五百年史發行所　東京　二酉社內　振替四七一〇番　二酉名著刊行會

人文の淵源此にあり

天覽台覽　杉浦俊香先生著（評畫十四頁）

畫界の維新

內容目次◉美を閑却せる世界改造は空想のみ◉至上美の本義を明かにす◉墮落せる我が畫界◉佛國畫界の推移を顧みよ◉佛國に於ける十九世紀以後の畫風◉迷宮に入れる我が畫界◉學校の敎は美術を衰滅す◉公設展覽會の多くは國民性を破壞す◉畫品の劣惡を嘆じて寸評を試む評畫十四頁◉美術政策の謬は國家に及ぶ◉美術界の腐敗は速治を要す

洋裝定價金壹圓四拾五錢　天鵝絨金壹圓六拾錢　送料十八錢

經學院大提學金允植先生序　今關天彭先生著（上製四六版三百七十頁）

支那人文講話

內容目次（◉文字の話◉書籍の話◉經學の變遷◉文學の變遷◉書道に就て◉宋以前の繪畫◉宋以後の繪畫◉小說戲曲一斑◉道敎の話◉三代の金石◉山東の壽石◉支那最近の思想◉清朝小說五種）

定價金貳圓參拾貳錢　特殊價料金壹圓八錢

東京市牛込拂方町　奧元帥邸橫通　二酉社發賣　振替口座東京四一〇七番

現代紳士趣味涵養の源泉

賜天覽

顧問 文學博士 市村瓚次郎先生
文學博士 瀧精一先生

東洋畫論集成

東洋畫論集成に收載したる諸書は、多く浩瀚なる叢書中に散在して容易に蒐集すべからざるものなるが、斯學に造詣深き今關天彭先生が十數年の苦心を費して善本を博搜し、東洋學界の權威たる市村器堂博士・桂湖邨先生及び論壇畫壇の耆宿たる德富蘇峰先生・瀧節庵博士・益頭峻南先生の嚴密なる評正の下に、一字一句を苟もせず、漢文の全體を和譯して鮮明なる五號活字に附し、總振假名を施し、菊版一千二百餘頁に上る大册を成せり。東洋畫論の精華悉く此に集まる。

本書は曩に豫約出版したる處非常の喝采を博し新たに註文せらるゝ人士尠からず其の要請を充たすと共に汎く畫家及び紳士諸君に發賣す。今回の發賣部數は極めて少數にして僅に數百部に過ぎず。此の際購入なきに於ては永遠に此の良書を得る能はざるべし。

◉壹部（上下貳卷）定價金拾五圓 送料內地四十五錢、鮮臺滿七十五錢、引換便拾八錢增、市內は送料不要

畫界の維新發行所 東京牛込區拂方町奧元帥邸横通振替口座東京參壹貳參八番 讀書書院

木版凸版畫大小五百個
菊版上製天金
紙數千二百卅頁

德富猪一郎先生 桂五十郎先生 益頭尙志先生 今關壽麿先生 訂纂

好評五版

畫家及鑑賞家座右の祕典

理學博士 遠藤吉三郎先生著 好評六版

西洋中毒

上製 定價四圓 特價貳圓 送料四百餘頁 代金引換便拾錢也 貳圓貳十八錢增

思想的にも經濟的にも疲弊せる國力を回復せんには此書の所論を實踐せざるべからずして頓に注文殺到す

◈大阪毎日新聞曰 西洋文明の大なる矛盾を說き猶ほ進んで各種の問題に涉りて西洋中毒の弊を一々指摘したるものなるが書中中學英語科廢止論、羅馬字反對論、加州問題等を始めとして孰れも相當根據ある議論多く世人の反省に資すべき文字尠からず。

◈國民新聞曰 政治文學人情風俗等百般の事物に現はれたる西洋中毒の弊を具さに論じ來りて甚だ適切なるものあり宜しく我等は之に覺醒すべきなり。

◈時事新報曰 西洋心醉の如何に我國に無意味に有害なるかを指摘し事實の上より最も緊切に其迷想を打破す意氣の熾烈にして論旨の凱切なる殊に一字一句の末にも悉く些の空論を着けざる點に於て何人にも一讀を促すべき價値あり。（以上月日順）

東京市牛込區拂方町四番 電話牛込三一六番 二酉社 振替東京四七一〇番

東京株式取引所理事
東京帝國大學經濟學部講師 河合良成氏著

取引所講話

上製菊版約四百頁
特價參圓五拾錢
送料十八錢
代金引換便參拾壹錢
市内配達無料

本書は河合先生が學理と實際との中間に立ち、經濟法律の兩方面より取引所を解說せられたるものに係る。先生は農商務省在官時代より取引所を專攻し一昨年歐米市場を踏査して歸來激務の傍ら本書を編述せらる。其の取引所論中に於ける一權威たるは勿論、廣く金融業者、商工業者、經濟學者、裁判官、辯護士、學生等の好箇の參考書たり、眞に取引所を理解せんと欲するの士は一讀を忘たるべからず。

◉好評拾版

東京市牛込區拂方町 電話番町三一六四番 振替東京四七一〇番 一二酉社

林茂淳先生著

度量衡講話

上製 壹圓八拾錢 送料拾貳錢
諸官衙、學校ヨリ注文殺到ス

總紙數 四六判 二百十頁

物の長短高低厚薄大小多少輕重等を計量するに標準とすべきものは『ものさし』と『ます』と『はかり』で此の三つのものは貨幣と相並び經濟上必要缺ぐことの出來ないもので國民の日常生活の上に關係の無いものはありませぬ。『度量衡講話』は我國の『ものさし』『ます』『はかり』の既往現在將來に亙り、平易簡明に講述したもので、併せて便利なる新度量衡卽ちメートル法の、成るべく速に實行されたいと云ふ希望を齎らして、世に現はれたものであります。先般、度量衡改正法律が發布され、本年七月一日から實施されることゝなり、それに付き二三の書籍も出でましたが、此種の書籍は未だ一つも發行になりませぬ。昔の人が指を伸べて寸を知り、手を伸して尺を知つてから、今日メートル法の實行に至るまでの興味に富んだ物語は此書を措いて他にありませぬ。改正度量衡法の全文も掲載してあります。農商務省工務局發表の『度量衡法令改正事項の要旨』も、メートル換算表も附載してあります。速に御購讀を御勸め致します。

東京牛込拂方町 奥元帥邸横通 二酉社 振替東京四七一〇番 電話牛込三一六四番

人類史上に一新紀元を劃せんとする世界に

黑人問題

大學寮、東洋協會大學教授
宇都宮高等農林學校講師　滿川龜太郎氏著

問題　現帝室內大臣牧野伸顯伯の肖像がリンカーンのそれと共に黑人家庭に併揭せらるゝ理由は何か

新著述『黑人問題』は此の疑問に答へて遺憾なきを得べし。黑人問題は今や單なる米國奴隷の問題に非ず。實に人類史上に一新生面を拓き來らんとする世界的問題也。同時に虐げられたる有色民族解放の大使命は我が日本國民の肩上に懸れる國家的問題也

漲る民族運動國にては最先鞭の新問題

日本帝國が將來太平洋を中心とする第二世界大戰の渦中に立つことあるべき場合、一億五千萬を算する黑人の向背は、國家の運命に偉大なる影響無しといふ能はず。

全日本愛國正義の戰士よ。地球上の距離刻々に短縮せられつゝある今日、黑人問題こそ最も眞劍に考慮し研究して有事の日に備ふべき問題ならずや。

著者は『奪はれたる亞細亞』『東西人種鬪爭史觀』等の著述を以て聞ゆるの士なりと雖も、固より單なる學究に非ずして、世界的眼光を有する民族解放運動の一使徒たり。されば『黑人問題』全篇十四章六十五節、一萬八千言、志氣の旺盛にして、文章に精彩あるは言を俟たざるところ。黑人問題としての邦文最初の本書を敢て弘く天下具眼の士に薦む。

四六版三百三十餘頁、總クロース表紙
意匠清新、附圖及寫眞數葉、箱入美裝

定價金貳圓
遞送料金拾八錢

發行所　東京市牛込區拂方町奧元帥邸横通
電話牛込三一六四番
振替東京四七一〇番
一酉社內

一酉名著刊行會

包荒子先生著譯

賜天覽台覽

世界革命之裏面

元ルス原本シオンの議定書全譯收錄

諸方より著譯者の何人なるかを質問せらるるも今は某高等官と云ふの外之を言明するの自由を有せざるを遺憾とす

上製四六判四百七十頁　國家的普及特價金貳圓七拾錢　送料十八錢　代金引換便拾錢增

帝國の根柢を覆さんとする現代の危險思想の源泉、自由、平等革命の叫び等は是れ皆猶太民族の有する他民族崩潰政策の一部である彼等は右に資本主義左に共產主義を持して世界に望み歐米の言論機關を掌握し世界の財界を支配し政治外交を左右しつゝあり今や我が國民も彼等の術策に飜弄され北米の排日近時又南米の排日、圓價の暴落、淫蕩文藝の流行、奢侈の助長殊に近時頻發せし恐懼すべき不敬事件は皆是彼等の放散する危險思想に胚胎す。

本書刊行の目的は彼等の祕密政略と其の實勢力とを我が國民に會得せしめて之が警戒を促すと共に彼等の民族的自覺及び結合並に其政治財政社會學等に於て他山の石として吾人の學ぶべきもの多々あるを以てなり敢て一本を薦む

好評第十版

東京市牛込區拂方町　奥元帥邸横通

振替東京四三一七　電話牛込一六一〇　番

二酉社

73
86

終